

2010年12月期 第2四半期 決算説明資料

2010年8月16日

カルナバイオサイエンス株式会社
代表取締役社長 吉野公一郎



4572



1. 会社と事業の概要	...	3
2. 平成22年12月期 第2四半期累計期間の決算の概要	...	6
3. 中期計画について	...	16

会社概要

■会社名: カルナバイオサイエンス株式会社
(英文社名: Carna Biosciences, Inc.)

(2010年6月末現在)

■代表者名: 代表取締役社長
吉野公一郎

■設立: 2003年4月10日
(日本オルガノンからスピンオフ)
2003年10月業務開始

■上場日: 2008年3月25日

■資本金: 21億2,563万円

■発行済株式数: 58,710株

■株主数: 3,459名

■役員及び従業員数: 役職員59名(単体)

■所在地: 神戸市中央区港島南町1-5-5 BMA3F

神戸バイオメディカル創造センター研究棟内(ポートアイランド内)

■事業内容: キナーゼをターゲットとした創薬事業および創薬支援事業



ビジネス(1) 創薬支援ビジネス

- キナーゼに的を絞り、世界最大の品揃えを達成。これをコアに各種ビジネスを展開
- キナーゼ創薬のソリューションプロバイダー

□ キナーゼタンパク質

- ✓ 376 種類の高品質キナーゼタンパク質を供給可能

□ アッセイキット(開発)

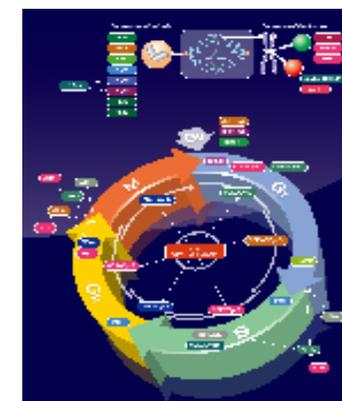
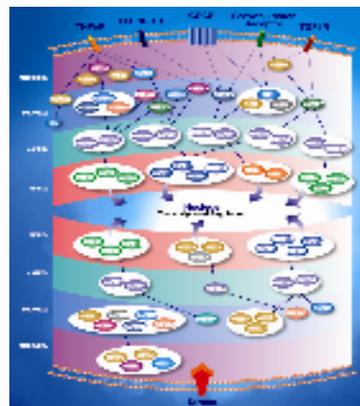
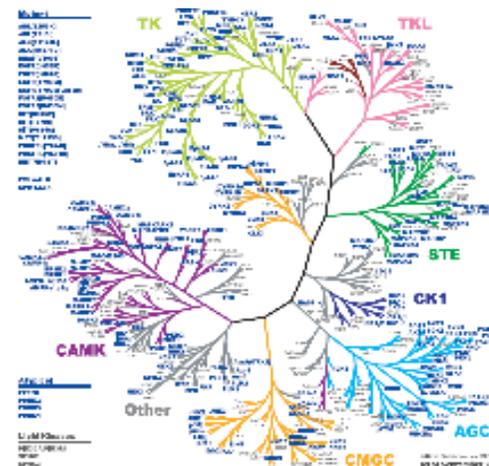
- ✓ 303 種類のキナーゼに対し、475種類のキットを準備

□ プロファイリング、スクリーニングサービス

- ✓ 304 種類のキナーゼに対してプロファイリング可能
- ✓ プリセレクトパネル(QuickScout™)

□ キナーゼX線結晶構造解析サービス

- ✓ CRELUX GmbHの代理店



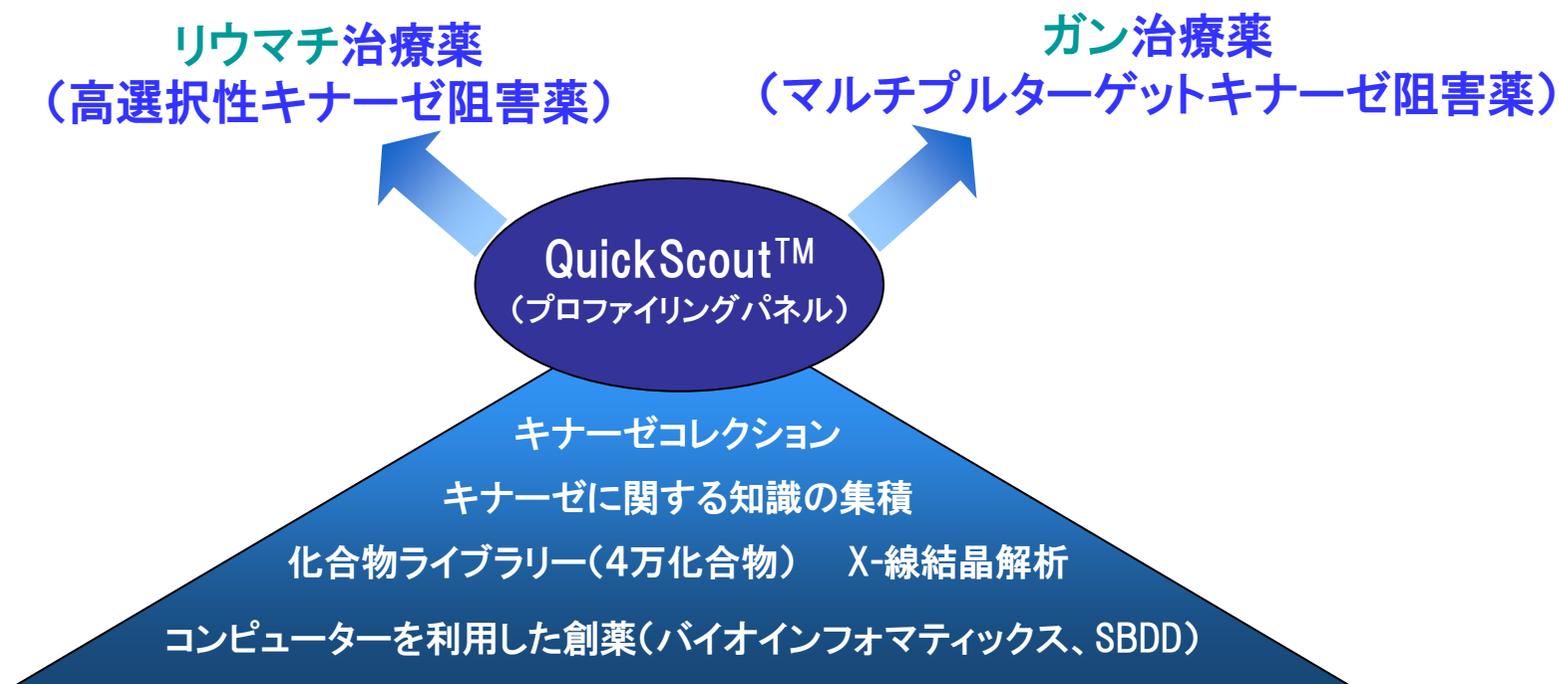
QuickScout™ Panels

※2010年6月末現在

ビジネス(2) 創薬ビジネス

アンメット・メディカル・ニーズに応える

ガンやリウマチの原因となっているキナーゼの働きを抑える化合物を創製し、治療効果の高い、副作用の少ない経口薬を生み出し、早期に製薬企業に導出する



平成22年12月期 第2四半期 決算の概要

第2四半期 経営成績の概況

- ✓売上高は期初計画を下回るが、前年同期比をやや上回る
- ✓営業損失、経常損失、当期純損失は、経費節減努力により計画比大幅改善

(百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
2009年12月期 第2四半期累計期間	318	△162	△158	△162
2010年12月期 第2四半期累計期間	323	△181	△150	△157
2010年12月期 第2四半期累計期間 計画値	385	△194	△165	△173
前年同期比	4	△19	7	4
期初計画比 ※2010年2月12日発表	△62	12	14	15

※ 2010年8月6日に通期業績予想を修正しております。

売上高323百万円(平成22年12月期 第2四半期累計期間)

■売上高が計画を下回った主たる理由

- ・ 為替の影響
- ・ OSI社が買収されたことによる顧客からの発注控え
- ・ 業界再編の影響

■損益改善の主たる理由

- ・ プロファイリングサービスのボリューム拡大
- ・ 経費削減努力
- ・ 研究開発の効率化

P/Lの概況

		(百万円)			※ご参考	
		2010年12月期 2Q累計実績	前年同期比 (増減)	対計画比 (差異)	2009年12月期 2Q累計 実績	2010年12月期 2Q累計 計画
売上	創薬支援事業	309	11	△ 64	298	373
	創薬事業	13	△ 6	1	20	12
	合 計	323	4	△ 62	318	385
売上原価		102	8	△ 35	94	138
売上総利益		220	△ 3	△ 26	224	247
販管費	研究開発費	175	2	△ 16	172	191
	販管費 (研究開発費を除く)	227	13	△ 22	214	249
	合 計	402	15	△ 38	387	441
営業利益		△181	△ 19	12	△ 162	△ 194
営業外損益		30	26	2	4	28
経常利益		△ 150	7	14	△ 158	△ 165
特別損失		5	2	0	3	6
当期純利益		△ 157	4	15	△ 162	△ 173

※ 2010年8月6日に通期業績予想を修正しております。

キャッシュ・フローの概況

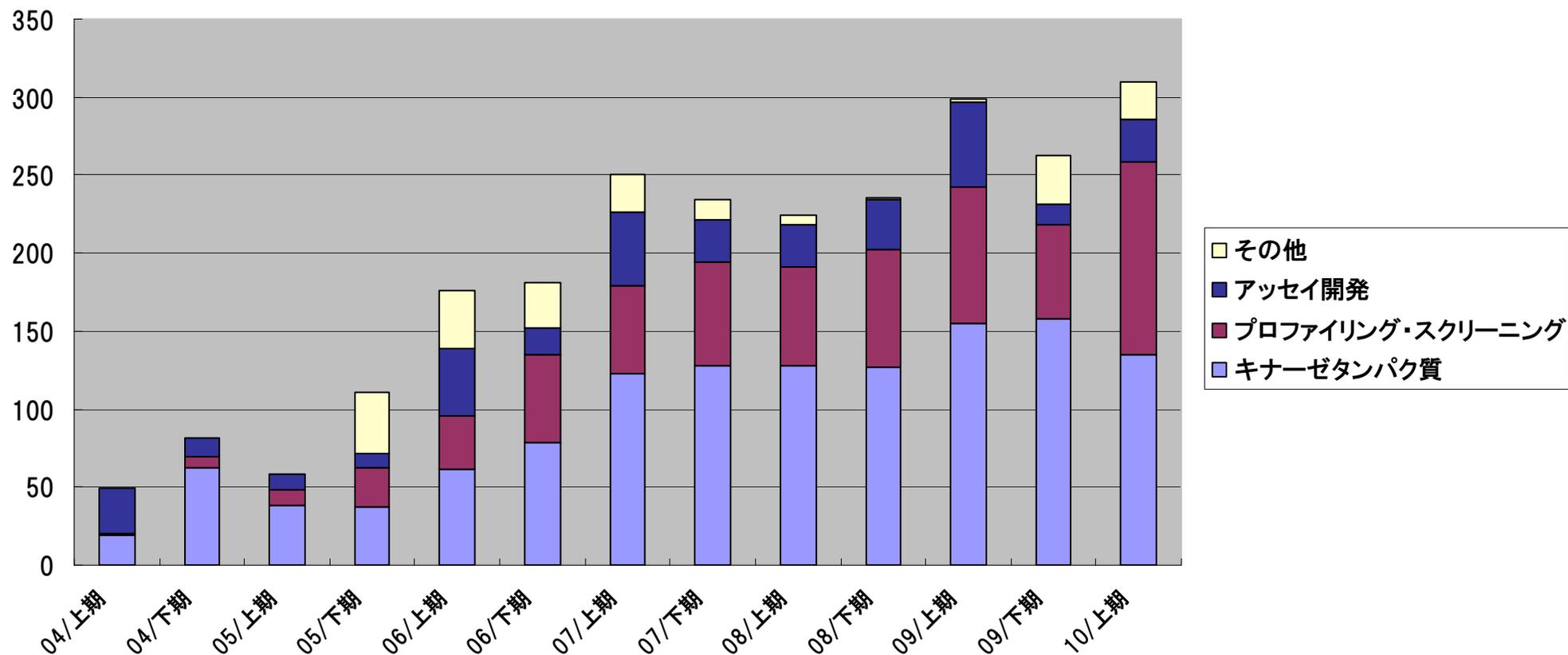
(単位:百万円)

	2010年12月期 第2四半期累計期間	2009年12月期 第2四半期累計期間	増減
営業活動による キャッシュ・フロー	△175	△316	140
投資活動による キャッシュ・フロー	△ 19	76	△95
財務活動による キャッシュ・フロー	37	-	37
増減額	△ 157	△ 239	82
現金及び 現金同等物の残高	1,333	1,192	140

商品別売上高の実績(創薬支援事業)

商品別売上高(創薬支援事業)

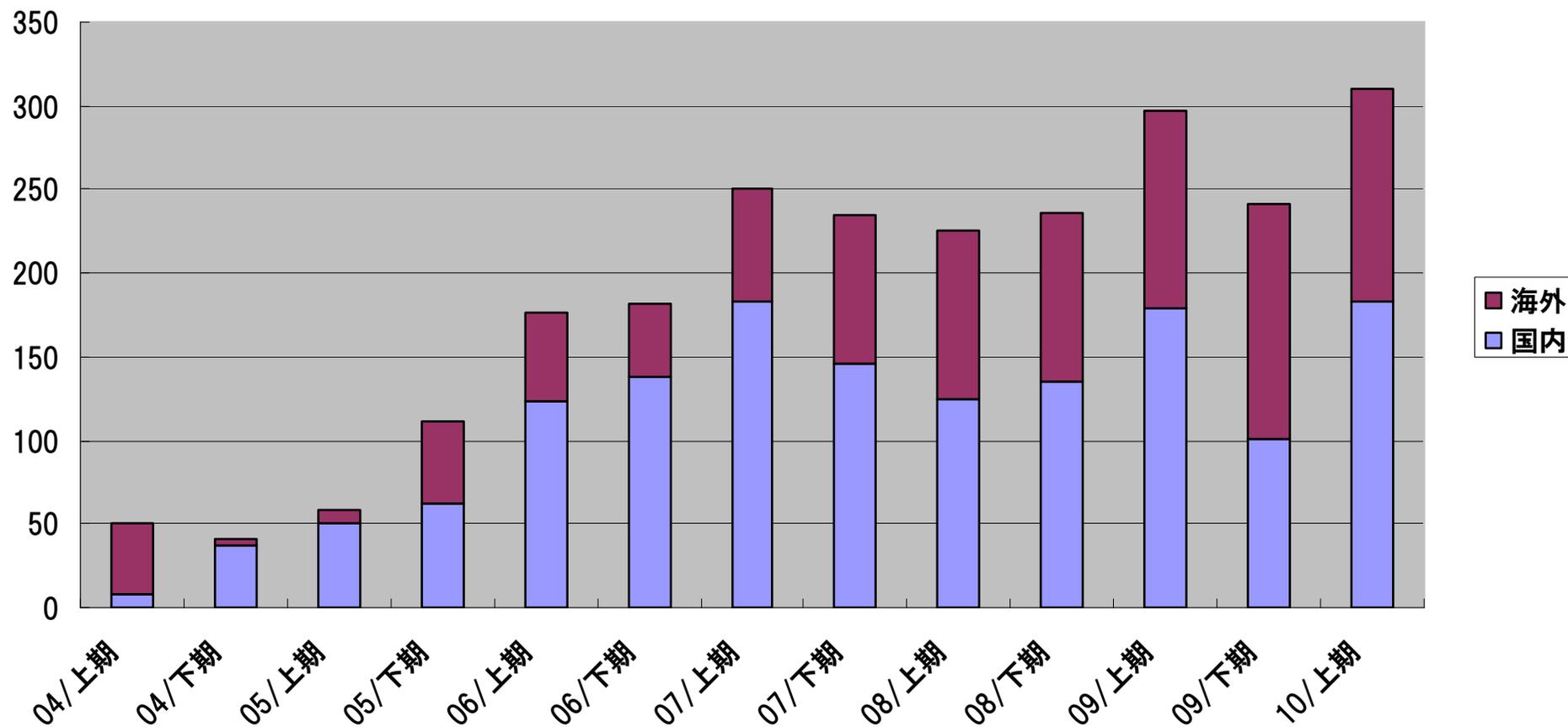
(百万円)



地域別売上高の実績(創薬支援事業)

地域別売上高(創薬支援事業)

(百万円)



B/S概要

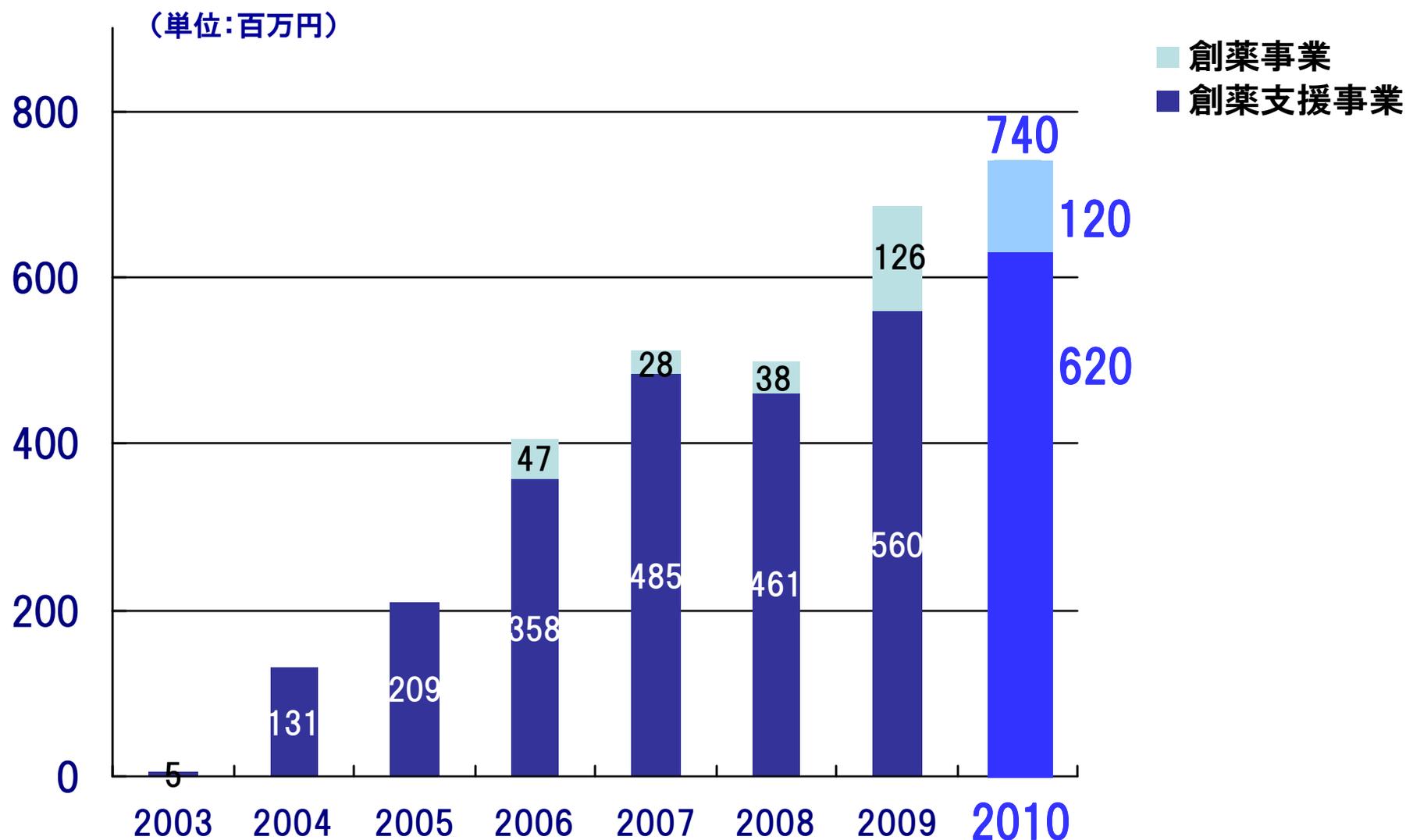
(百万円)

	10年2Q末		09年12月末		増減額	
		構成比		構成比		
流動資産	1,626	87.4%	1,760	86.1%	△ 134	
	現金及び預金	1,083	58.2%	1,290	63.1%	△ 207
	有価証券 ※	300	16.1%	200	9.8%	100
	その他	243	13.1%	269	13.2%	△ 26
固定資産	235	12.6%	283	13.9%	△ 48	
資産合計	1,861	100.0%	2,043	100.0%	△ 182	
負債合計	246	13.2%	242	11.9%	3	
株主資本計	1,642	88.2%	1,800	88.1%	△ 157	
評価・換算差額等	-27	-1.5%	0	0.0%	△ 28	
負債・資本合計	1,861	100.0%	2,043	100.0%	△ 182	

※有価証券は、リスクの極めて低い運用商品です

10年Q1で100百万円銀行借入
Q2末借入残高:165百万円

事業別売上高(連結)



※ 2010年8月6日に通期業績予想を修正しております。

2010年度売上高、損益予測(連結)

(単位:百万円)

		2009年12月期	2010年12月期 (計画)	対前年比
売上高	創薬支援事業	560	620	10.7%
	創薬事業	126	120	△4.8%
	合計	687	740	7.7%
売上原価		215	219	
売上総利益		471	520	10.4%
販管費	研究開発費	391	417	
	販管費 (研究開発費を除く)	424	447	
	合計	815	865	
営業利益(△:損失)		△344	△344	-
営業外収益(△:損失)		△5	28	
経常利益(△:損失)		△349	△315	-
特別利益(△:損失)		36	△26	
当期純利益(△:損失)		△315	△344	-

※ 2010年8月6日に通期業績予想を修正しております。

中期計画について

通期業績予想数値の修正(連結)

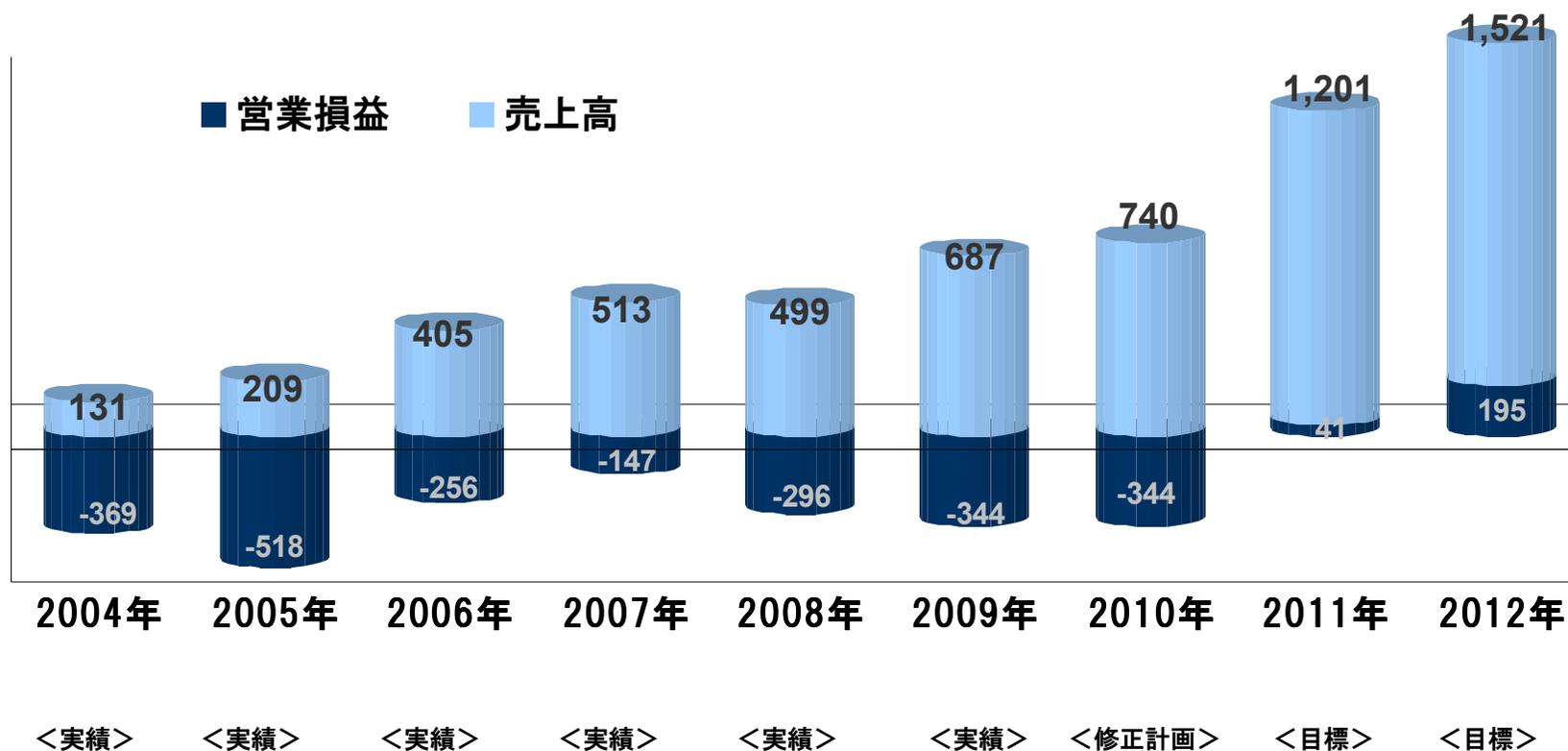
(百万円)

連結	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
2010年12月期(修正前)	840	<u>△321</u>	<u>△294</u>	<u>△304</u>
2010年12月期(修正後)	740	<u>△344</u>	<u>△315</u>	<u>△344</u>

※ 詳細については、2010年8月6日発表の「特別損失の計上及び業績予想の修正に関するお知らせ」及び「マイルストーン開示に係る事業計画の修正について(平成22年12月期～平成24年12月期)」をご覧ください

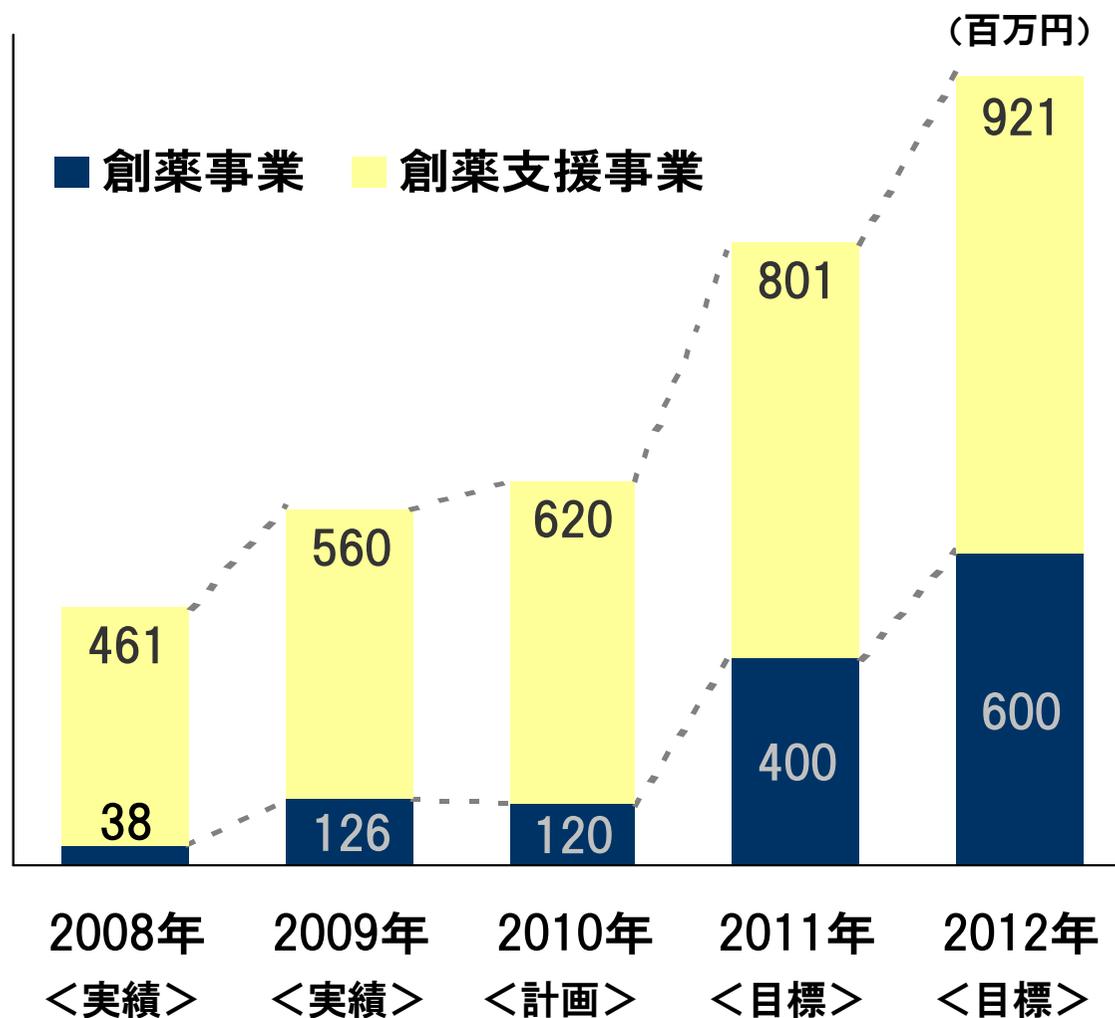
売上高・損益の計画 (百万円)

連結	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
2010年12月期(修正計画)	740	△344	△315	△344
2011年12月期(目標)	1,201	41	87	81
2012年12月期(目標)	1,521	195	192	144



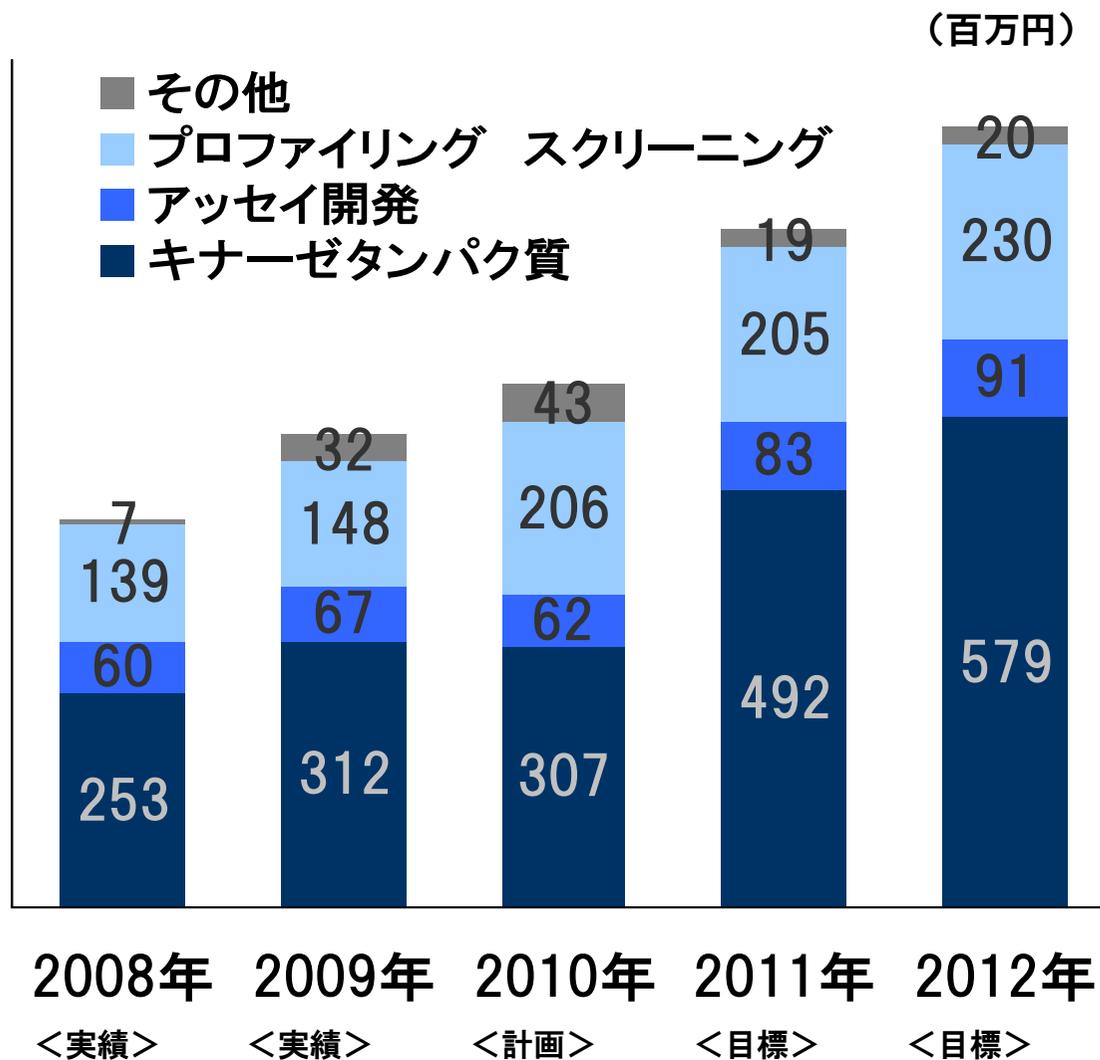
事業別売上高(計画と目標)

事業別計画



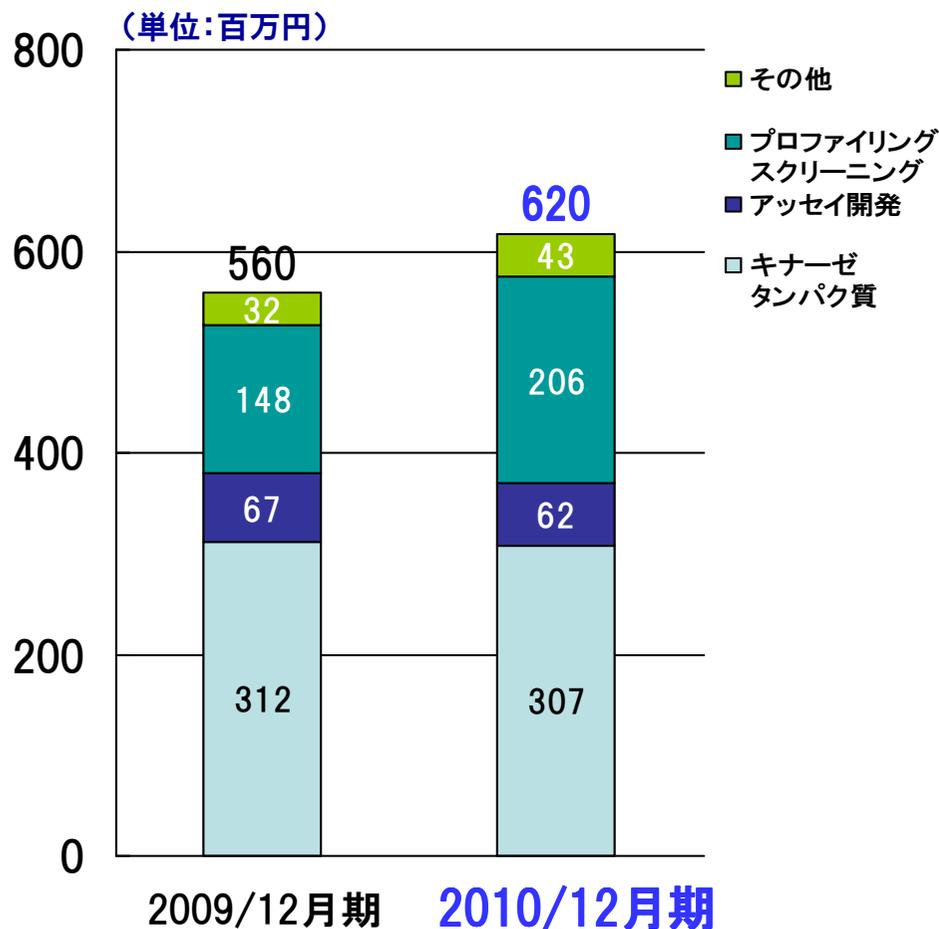
商品別売上高(計画と目標)

商品別計画

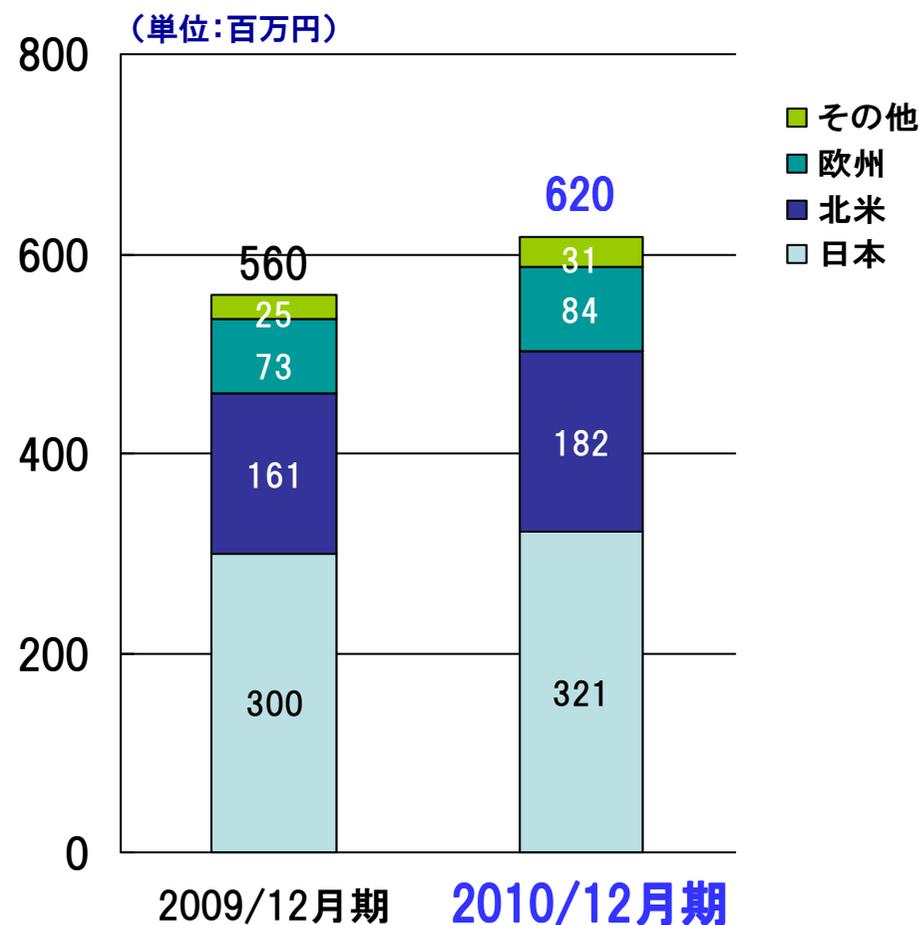


2010年度売上高予測(創薬支援事業、連結)

製品別予測



地域別予測



売上拡大策－創薬支援事業

① 海外売上の拡大・国内売上の好調維持

- ⇒これまで築いてきた顧客基盤を活用した新しい顧客ニーズの発掘、対応
- ⇒ 新製品・新サービス、付加価値の高いサービスの開発・拡充、1社あたりの売上ボリュームの拡大

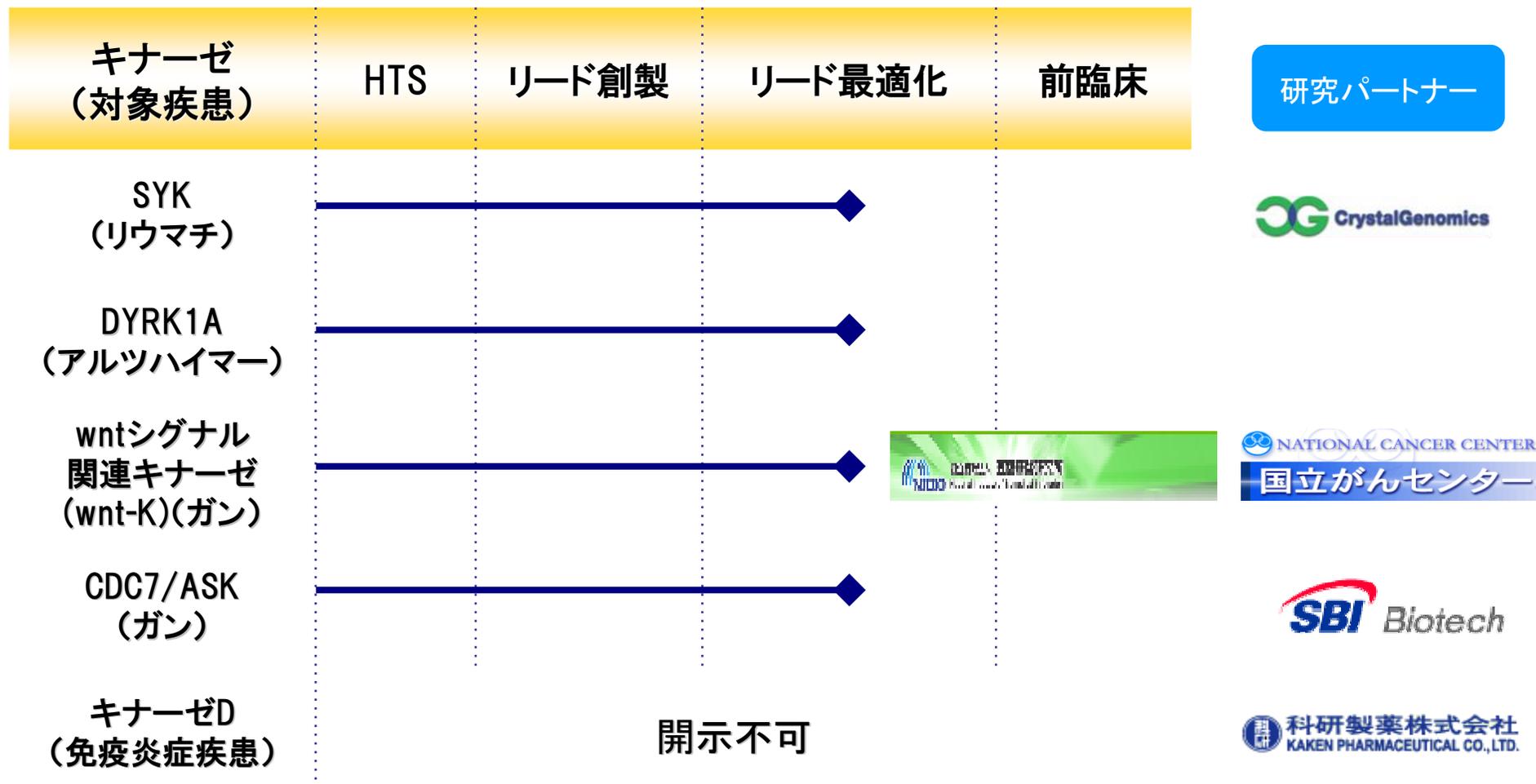
② 提携の強化

- 新興創薬市場(中国、インド、シンガポール)での販売強化
 - ⇒ ex. 現地有力販売代理店との提携、活用
- 流通ルートの整備、拡充
 - ⇒ ex. 米国広域代理店との提携、活用
- OEM供給を含めた有力企業とのアライアンス積極化
 - ⇒ ex. 機器メーカー・試薬メーカーとのアッセイキット共同開発
- 他社製品・サービスの導入による製品・サービスの品揃え強化

事業運営の効率化

1. 研究開発活動の効率化
2. 製品・サービスの製造・試験過程での効率性向上
3. 諸経費の削減
販管費の圧縮 $\Delta 31$ 百万円(通期見込)

研究パイプライン



基盤研の研究支援制度への採択について

1. 研究支援制度の概要

運営組織	独立行政法人 医薬基盤研究所
支援制度の名称	「保険医療分野における基礎研究推進事業」平成22年新規研究プロジェクト
助成金額	最長5年間に亘り各年1億円(上限)

※平成22年度の研究プロジェクトの採択にあたっては、230の研究プロジェクトから最終的に21の研究プロジェクトの採択が決定されました。

2. 採択された研究プロジェクト

TNIKキナーゼを標的とした大腸がん治療薬の開発

— TNIKの結晶構造解析

— TNIK阻害化合物の最適化

※国立がん研究センターとの共同研究

・TNIK: Wntシグナル伝達経路に重要な役割を果たしているキナーゼであり、カルナバイオサイエンスは、現在、自社の優れたキナーゼ創薬技術を用いて日本発の画期的な大腸ガン治療薬の開発に取り組んでいます。

・大腸ガン: 生活習慣の欧米化が進んでいるため、その患者数が近年増加傾向にあり、日本国内だけでも毎年4万人以上が大腸ガンで死亡しており、新たな治療薬の開発が望まれています。大腸ガン患者の8割以上は、Wntシグナルと呼ばれる経路に存在するAPC (adenomatous polyposis coli)ガン抑制遺伝子に変異があることが知られています。このAPC遺伝子の変異によって、下流の β -カテニンの分解に異常が生じ、その結果、蓄積した β -カテニンが遺伝子の転写活性化をもたらすことでガンを引き起こすと考えられています。これまで世界中の研究機関がWntシグナル伝達経路を遮断する薬の開発を目指してきましたが、有効な標的分子を見出すことができませんでした。

平成22年7月16日

報道関係者 各位
プレスリリース

カルナバイオサイエンス株式会社

当社が製造・販売権を保有する DGK β ノックアウトマウスに関する

研究成果の科学雑誌掲載について

当社はキナーゼをターゲットとした創薬支援事業及び創薬事業を行っておりますが、これらの事業の研究活動の一環として大阪大学より「ジアシルグリセロールキナーゼ β （以下、「DGK β 」）ノックアウトマウス」の製造・販売権を得ております。

このたび、当社の共同研究パートナーである岐阜薬科大学の原英彰教授、及び神戸大学の齋藤尚亮教授を中心とする研究グループは、脳の「海馬」と呼ばれる部位に多く存在する DGK β が記憶に関与していることを DGK β ノックアウトマウスを使った実験で証明し、その研究成果を研究論文として米国オンライン科学雑誌「プロス・ワン (PLoS One)」に発表いたしました。

(研究論文の URL : <http://www.plosone.org/article/info%3Adoi%2F10.1371%2Fjournal.pone.0011602>)

同研究グループは DGK β ノックアウトマウスが正常なマウスに比べて記憶力が劣り、記憶の形成・保持に障害を持つことを発見しました。DGK β の働きの更なる研究により、アルツハイマー病などの精神疾患メカニズムの解明や新薬の研究開発が期待されます。

当社は新薬の研究開発を行う製薬企業に向け、DGK β ノックアウトマウスを提供することを検討しており、現在、米国においてテストマーケティングを行っております。

平成22年7月16日

報道関係者 各位
プレスリリース

財団法人 ヒューマンサイエンス振興財団
カルナバイオサイエンス株式会社

財団法人ヒューマンサイエンス振興財団とカルナバイオサイエンス株式会社との

「抗癌剤スクリーニング方法」のライセンス契約締結に関するお知らせ

このたび、財団法人ヒューマンサイエンス振興財団 厚生労働大臣認定 TLO ヒューマンサイエンス技術移転センター (HSTTC) とカルナバイオサイエンス株式会社 (以下、「カルナバイオサイエンス」という) は、独立行政法人国立がん研究センター (以下、「国立がん研究センター」という) の発明「抗癌剤のスクリーニング方法」の出願特許に関するライセンス契約を締結いたしましたので、お知らせいたします。

この契約により、カルナバイオサイエンスは、当該発明の日本国の通常実施権を取得いたしました。

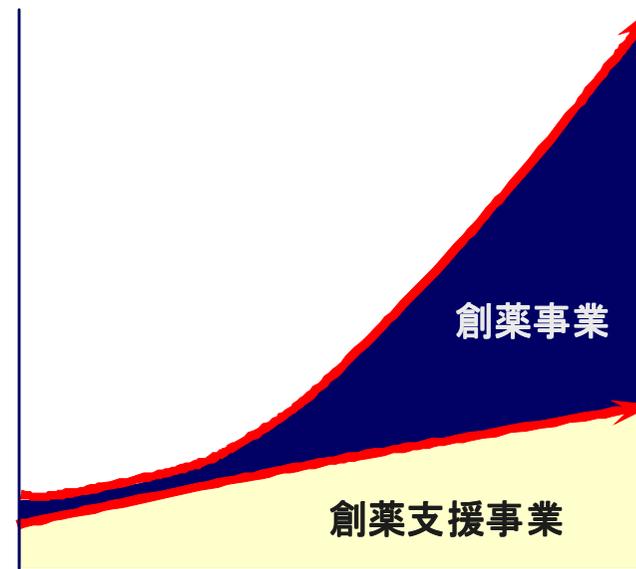
このたび実施許諾の対象となった本発明は、大腸ガンの多くの症例においてβ-カテニンと細胞因子-4 (TCF4) のシグナル伝達経路に活性化がみられていることから、本シグナル伝達経路が関与するガンに有効な抗ガン剤のスクリーニングに関する技術です。本スクリーニング技術を用いることにより、β-カテニン/TCF4 転写複体の異常な転写活性化に寄与している TNK1 というキナーゼを阻害する化合物を効率的に選択することができ、大腸ガンに有効な新規分子標的治療薬の開発が可能となります。

今回の契約により、カルナバイオサイエンスの有するキナーゼに特化した創薬基盤技術および創薬技術で創出された新薬候補化合物群の中から、ガンに対してより効果の高い化合物を選択することが可能となり、カルナバイオサイエンスと国立がん研究センターとの共同研究 (平成20年6月16日付、カルナバイオサイエンスのプレスリリース参照) が、今後、より円滑かつ迅速に進捗することが期待できます。

今後の事業拡大イメージ

株主・投資家の皆様へ

1. 当社の創薬事業は、従来の創薬ベンチャーとは異なり、コスト負担の大きい第3相臨床試験(PIII)以降の段階は手掛けず、それ以前のいずれかの段階で大手製薬企業に化合物を導出するビジネスモデルを想定しております。
2. 当社は創薬支援事業においては2006年度以降黒字化しております。今後も創薬支援事業での売上を伸ばすことで、2011年には、会社全体として黒字化を目指します。
3. 当社は、ガンなどを対象疾患とするキナーゼ阻害薬の創薬研究をスピーディーに進めてまいりますが、一般的には、創薬の成果が実るには長い年月がかかることをご理解下さい。
4. 中長期的には成長トレンドにあるため、カルナバイオサイエンスの株式は、中長期的視野で保有していただきたく存じます。



今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

カルナバイオサイエンス株式会社

経営管理本部 経営企画部

〒650-0047

兵庫県神戸市中央区港島南町1-5-5 BMA3F

Tel (078)302-7075 Fax (078)302-6665

<http://www.carnabio.com/japanese/>

ir-team@carnabio.com

本資料につきましては投資家の皆様への情報提供のみを目的としたものであり、売買の勧誘を目的としたものではありません。本資料における、将来予想に関する記述につきましては、目標や予測に基づいており、確約や保証を与えるものではありません。また、将来における当社の業績が、現在の当社の将来予想と異なる結果になることがある点を認識された上で、ご利用下さい。また、業界等に関する記述につきましても、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。本資料は、投資家の皆様がいかなる目的に利用される場合においても、ご自身の判断と責任において利用されることを前提にご提示させていただくものであり、当社はいかなる場合においてもその責任は負いません。